

Thème 1

## 帰納的言語習得とフランス語を「聞く」「話す」

渡邊 佳奈  
WATANABE Kana  
福岡大学  
fbkana(at)yahoo.co.jp

### 1. はじめに

本稿の主な目的は、帰納的言語習得において、フランス語を「聞く」「話す」という言語活動がどのようなステイタスをもつかを考察することである。帰納的言語習得は、能動的な体験を通しての学習である。「聞く」「話す」という言語活動は、帰納的言語習得と関係が深い。

帰納的言語習得は現在、外国語教育において求められる傾向にある。筆者は、高校と大学でフランス語の授業を担当している。高校では教科の選択科目としてのフランス語教育、大学では教養としてのフランス語教育に従事している。筆者がフランス語の授業を担当する高校の運営方針には、体験的で探求的な学習、3年間の系統を重視した学習、コミュニケーション能力やプレゼンテーションの能力の育成などが挙げられている。2018年告示高等学校指導要領の外国語活動と外国語科では、コミュニケーション能力の育成を言語活動を通して行うことが目標とされた。2017年に告示された小学校および中学校学習指導要領では「実際に英語を使用して互いの気持ちを伝え合うなどの言語活動」と「言語材料について理解したり、練習したりするための指導」とが分けられた。後者は必要に応じて行うことと記されている。

帰納的言語習得には、連携性や継続性も求められる。教育現場では近年、連携や継続性が望まれている。小学校から高校までの連携、高校と大学の連携、各教育機関内での学習内容や方法の継続性が重要視されつつある。帰納的言語習得をいかに連携、継続するかが問題である。

### 2. 言語習得法と言語活動

#### 2.1 帰納的言語習得と演繹的言語習得

帰納的言語習得では、言語事実から自分で法則を導き出す。帰納は、個々の具体的な事実から一般法則を導く推論である。帰納には、事実の集合体であるデータが必要不可欠である。

帰納的言語習得は、言語学の研究プロセスに類似する。言語研究の本質は、パロールの観察を通じたラングの探求にある。言語研究は、パロールをデータとした帰納的学問である。

一方、演繹的言語習得では、法則を事実にあてがい妥当性を確認する。演繹は、前提となる定義や仮定から論理展開を行う推論である。演繹的学問としては、とくに数学がある。

複言語主義には、演繹的言語習得よりも帰納的言語習得の方が適している。対象となる言語が複数になれば、それらの言語の間の関係が個々の具体的なデータとならざるをえない。

#### 2.2 「聞く」

「聞く」ことは、聴覚を通してえた音声をラングとして意味に結びつけることである。音を

聴く能力と聴いた音に意味を与える能力は、別物である。聴いた音が意味をなすには、思考が必要である。その思考には経験や知識だけでなく、個々の状況や文脈を考慮する能力も必要である。「聞く」ことは、いわば帰納と演繹の両面を備えた活動であると言ってよい。

パロールとしての音声を聴くことにも、経験や知識が必要である。フランス語は、36の音素（16の母音と20の子音）をもつ。一方、日本語は22の音素（5の母音と17の子音）からなる。言語は、限られた音素から無数の語彙を産出できる経済性に優れた道具である。しかし日本人がフランス語を学習するときには、14の聴き慣れない音素の聴き取りを学習しなければならない。この学習は、言語学においては、聴覚音声学の対象となる。

### 2.3 「話す」

「話す」という言語活動では、「聞く」能力に加えて、文法・語彙など様々な知識を能動的に活用することが求められる。「話す」には、相手が意図することを正しく「聞く」ことが必要である。規範的な文法・語彙だけでなく、口語文法や、場合によっては流行語や新語、引用などの知識が必要な場合もある。「話す」ためには、ラングの知識が必要不可欠である。

パロールとしての発音にも、経験や知識が必要である。フランス語の調音では、調音器官の1つである舌が、日本語の場合よりも活発かつ多様に動作する。たとえば *riz* [ʁi] の [ʁ] は、舌先が下の歯の裏にあり、舌の奥が軟口蓋にもちあがって産出される口蓋垂摩擦音である。 *lit* [li] の [l] は、舌先は上歯の裏にあてられ、息が舌の両側から分かれて外にでる歯茎側面接近音である。日本人がフランス語を学習するときには、このような（日本語にはない）調音の相違を学習しなければならない。この学習は、言語学においては、調音音声学の対象となる。

### 2.4 「読む」と「書く」

「読む」という言語活動は、基本的に、「聞く」ことを前提とする。文字は、音声としての言語を再記号化して、転写したものである。再記号化が関与する点において、「読む」ことは「聞く」ことと比べて、より抽象的な言語活動だと言ってよい。ただし「読む」ことには、「聞く」ことにはない文法・語彙が必要とされる場合もある。レトリックのような、文化的知識が求められることもある。

「書く」という言語活動は、基本的に、「話す」ことを前提にしている。文字は、音声としての言語を再記号化して、転写するものである。再記号化が関与する点において、「書く」ことは「話す」ことと比べて、より抽象的な言語活動だと言うことができる。ただし「書く」ことには、正書法のような「話す」ことにはない文法・語彙が必要とされる場合もある。

## 3. コミュニケーション周辺の用語概念

### 3.1 自己と他者

「自己」とは自分によって把握される自分自身であり、「他者」とは自分の理解が及ばない存在である。「自己」は「自分」と類義語であるが、同義語ではない。同様に、「他者」と「他人」も類義語ではあるが、同義語ではない。「自己」は自分によって自分を把握しなければ成立しないが、「自分」は自分によって自分自身のことを把握する必要はない。「他人」とは自分以外の人のことであり、「他者」には理解することが不可能という前提が内蔵されている。

「自己」は後驗的 (a posteriori) に形成される。人間は誕生したときには、「自己」を持ちあわせてはいない。初めは、母親や父親、兄弟姉妹などを通じて、自分とは異なる存在を知る。学校に行くようになれば、友人との比較により、自分の性格や自分の得意なことや不得意なことを考え始める。「自己」を形成していくためには、「他者」が必要不可欠である。

### 3.2 間主観性と間身体性

間主観性とは「他者も自分と共通認識をもち、同じ世界にいて同じものを見ているはず」という私の確信であり、間身体性とは複数の人間が相互に身体感覚を通じて理解し合うことである。間主観性の裏付けをとるためには、他者とコミュニケーションをとりながら確かめていくしかない。間身体性をとりいれたコミュニケーションには、感情に直接的に語りかけ、強い印象を与える効果が期待できる。

間主観性と間身体性は、等しく重要である。間主観性は共同主観性とも呼ばれているように共同的な形で成立する主観である。すなわち、共同体の数だけ間主観性が存在する可能性もある。その共同主観性を客観的にみる努力は行わなければならない。感情に直接的に語りかける間身体性にも、配慮が必要である。身体は自分が思い通りに動かすことができる近い存在であると同時に、自分の意に反して思い通りには動かない遠い存在にもなり得るからである。

### 3.3 テキストとコンテクスト

テキストは意味を読み取ることのできる記号の総体であり、コンテクストは前後の脈絡や背景などである。テキストには、ファッションや広告などもある。しかし、一般的には言語によって書かれたものや話されたものについていう場合が多い。コンテクストには、言語内コンテクストと言語外コンテクストがある。言語内コンテクストは、文法、音韻、形態といった言語現象的存在であり、言語外コンテクストは場面や時間などの言語外現実からなる背景である。

同じテキストでもコンテクストが違えば意味が異なる。たとえば *il* が 3 人称単数の人称代名詞として使われる言語内コンテクストもあれば、非人称代名詞として用いられる言語内コンテクストもある。また、好きな人物に対して言った「嫌い！」と嫌いな人物に対して言った「嫌い！」が同一の意味をもつわけではないのは、言語外コンテクストが異なるからである。

### 3.4 親密言語と公共言語

親密言語は親密圏において用いられる言語であり、公共言語は公共圏において用いられる言語である。親密圏は、家族や友人たちなどとの間に構築されるような親密な人間関係や空間領域である。公共圏は、新聞やラジオ、公園や学校など不特定多数の人に開かれた領域である。

現在、親密言語の比重が公共言語に対して大きくなっている。インターネットの普及は、その大きな要因の1つである。インターネットを使用すれば、簡単に同じ興味や嗜好をもつ人と繋がることできる。また親密言語では、なじみのある言語が使われる可能性が高いため、意思疎通などの処理能力が早いという利点がある。しかし、誰が見ても聞いてもわかる正しさ（規範と言ってもよい）を追求する公共言語の利点も忘れてはならない。

### 3.5 ジェスチャーと表象

ジェスチャーは身振りや手振りによる動作によって他者に情報を伝達することであり、表象は表現することや表現されたもの、あるいは、知覚に基づいて意識される対象のイメージのことである。ジェスチャーは、多くの場合において記号体系がない。したがって、情報の伝達において様態や効率に個人差が生じることが多い。知覚に基づいて意識される対象のイメージとしては、知覚表象、記憶表象、想像表象がある。

表象には、文化的背景や社会的背景が影響し、さらには感覚的、具体的な側面もある。たとえば、エッフェル塔が表象するものは、日本人にとってとフランス人にとってでは異なる。同じフランス人であっても、アーティストと政治家ではエッフェル塔の表象が同じものとは断言できない。ジェスチャーもまた、文化的背景が異なると理解が難しい場合がある。丸めた手を鼻先にあて軽く回転させるジェスチャーは、フランスでは「酔っ払い」を意味する。このジェスチャーから筆者は鼻が伸びたピノキオを連想し「傲慢だ」と言われているのかと思った。

### 3.6 象徴とコードとアナロジー

象徴は、元来は関連のないもの同士の類似性を基に関連付ける行為である。象徴では「鳩と平和」「赤と情熱」「ダイヤモンドと美しさ」などのように、具体物と抽象概念が結びつく。

コードは、情報を表わす記号や符号の体系、または意味を解読するための規則のことである。コードの存在によって、それを知らなければ解読することが難しい記号体系が成立する。たとえば、ラングとしての文法や語彙は、パロールを産出し理解するためのコードである。

アナロジーは、類似性を基に別の事象を推測することである。つまり、アナロジーは類推である。たとえば、茶わん蒸しの作り方は知っているがプリン作り方は分からない場合でも、具材の代わりに砂糖を入れ、出汁を牛乳に置き換えればできるはずと類推することはできる。

## 4. 「聞く・話す」とコミュニケーション周辺の用語

### 4.1 「聞く・話す」と「自己と他者」

「読む・書く」という言語活動においては「自己と他者」が同じ空間、または同じ時間を共有する必然性はない。「読む」においては、確かに、視覚的に捉えた記号表現と記号内容を介して執筆者という他者の存在を感じとることもある。しかし、これは「読む」側が主観的に感じることにすぎない。現代の文学作品では、執筆者（「書く」主体）の存在を感じる必要性は必ずしもない。むしろ、読む側が多様な捉え方をすることを前提とする傾向にさえある。

これに対して「聞く・話す」という言語活動は、「読む・書く」と比べて、「自己と他者」との関係がより直接的である。「聞く・話す」は、多くの場合、「自己と他者」が同じ空間、あるいは同じ時間を共有する状態で成立する言語活動である。

### 4.2 「聞く・話す」と「間主観性と間身体性」と「ジェスチャー」

「聞く・話す」という言語活動は、「読む・書く」よりも、間主観的アプローチや間身体的アプローチに適している。間主観的アプローチや間身体的アプローチには、他者の存在が必要不可欠である。また「聞く・話す」は、通常、空間あるいは時間を共有する共時的活動である。他方「読む・書く」は共時的性質を呈しながらも、通時的な言語活動である。「読む・書く」は、文字という時間的な隔たりの存在を前提とした記号を用いるからである。

ジェスチャーは、「読む・書く」よりも「聞く・話す」に近い活動である。ジェスチャーは、間身体性を備えた記号活動だからである。ジェスチャーには、身体の動きを通して他者とのコミュニケーションを円滑に進め、他者の感覚に訴える機能がある。身体の動きを感じるためには、「自己」と「他者」が空間および時間を共有することが有利にはたらく。

### 4.3 「聞く・話す」と「親密言語と公共言語」

「聞く・話す」であっても「読む・書く」であっても、言語活動は親密圏、公共圏の両方で成立しうる。つまり「聞く・話す」と「読む・書く」にそれぞれ、親密言語と公共言語がある。

ただし「読む・書く」においては、親密言語か公共言語かのコードスイッチングが成立しにくい。あるいは、不必要である。「読む・書く」では、自己と他者間にある人間的、空間的な関係性が、ある程度固定されて変化しない（あるいは当初から考慮されない）からである。

他方「聞く・話す」においては、親密言語と公共言語間のコードスイッチングが成立しやすい。その必要性も高い。「聞く・話す」では、自己と他者間にある空間的な関係性が状況や意志や感情に応じて変化しやすいからである。空間的に近い関係にあれば、それだけ親密言語が使いやすい。反対に空間的に遠い関係にあれば、それだけ公共言語が使いやすい。

### 4.4 「聞く・話す」と「象徴とコードとアナロジー」と「表象」

「聞く・話す」は、他者の感性に直接的に訴えかけるという目的に、より適した言語活動で

ある。他者の感性に影響を与える方策としては、象徴、表象、コード、アナロジーなどがある。「聞く・話す」場面では、他者が眼前にいる。これは、具体的な現象である。具体的な現象つまり形而下の現象は感覚にもとづいているため、相互の理解がしやすいと言える。

ただし、表現の難度という観点を導入すれば「書く」や「読む」が、他者の感性に訴えかけるといった目的により適している場合もある。つまり難解なコード、難解なアナロジー、難解な象徴や表象については、文字という記号を使って表現する方が理解しやすいと思われる。解読に時間をかけることができるからである。時間をかけることによって生じる影響もある。

### 5. まとめ

帰納的言語習得において、「聞く」「話す」は共時性があり、空間的関係の調整が可能であるというステイタスをもつ点で、経済性の高い言語活動である。「経済性が高い」というのは、時間的経済性が高いことと、設備投資が不要なくシンプルだということを意味する。

自己と他者が「聞く」「話す」行為は、「読む」「書く」行為よりも直接的である。直接的な事象は、多くの場合、間接的な事象よりも理解がしやすい。また、直接的な現象は具体的な現象であることが多い。自己と他者の直接的なコミュニケーションにおいては、同じ時間、同じ空間を両者が共有しているからである。

直接的な関係が成立しやすい「聞く」「話す」によって、人間的な成長が促されることもある。高校で担当する筆者の授業では、一年間の学習成果の発表としてフランス語で劇を演ずることが多い。生徒たちは、テーマから配役の決定、小道具の作成、脚本作りなどを行う。限られた時間ではあるものの、この作業を行うことによって、生徒たちの成長が、特にコミュニケーション能力の向上が見られることが少なくない。他者の意見を聞き、自分の意見を述べ、自己を形成している。ジェスチャーを交えながら、相互理解を計っている姿も見られる。

自己は他者を通して形成される。世の中や人と関わることで成長がなされる。複数の他者が共存する教室は世間の縮図でもある。そして小さな世間としての教室の特質を活かすには、一人でも行える「読む」「書く」よりも、「聞く」「話す」ことの方により比重がおかれてよい。そのことが効率的な帰納的言語習得へと繋がる。

### [参考文献]

- 阿南婦美代・Elisabeth GUIMBRETIERE (2005) 『コミュニケーションのためのフランス語発音法』 駿河台出版社。
- 酒井英樹・廣守友人・吉田達弘他 (2018) 『「学ぶ・教える・考える」ための実践的英語科教育法』 大修館書店。
- 髭郁彦・川島浩一郎・渡邊淳也他 (2011) 『フランス語小事典』 駿河台出版社。
- 渡邊佳奈 (2009) 「フランス語における現在形のステイタス —有標の項の結束点としての無標の現在形—」 『九州フランス語文学会フランス文学論集』 第 44 号。
- 渡邊佳奈 (2010) 「単純未来における多義性 —選択時に発生する話者の意志—」 『九州フランス語文学会フランス文学論集』 第 45 号。
- 渡邊佳奈 (2013) 「学習成果を発表する機会のデザイン」 『関西フランス語教育研究会』 第 27 号。
- 渡邊佳奈 (2019) 「言語研究とフランス語教育 —フランス語教育に言語研究は必要?—」 『関西フランス語教育研究会』 第 33 号。